

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

G1日本ダービーが終了した翌週に、世代初の2歳戦が行われるという事が、JRAにおける近年の定番となっている。

一方、欧州の主要競馬場における芝平地シーズンは、3月下旬から4月初旬にかけて開幕するが、それと同時に2歳戦もスタートするのが、欧州における定番である。3月23日に仏国・パリ近郊のサンクルー競馬場で行われたメイドン(芝900m)を産駒のマイヨミアン(牡2)が制し、今季の新種牡馬としてイの一番に

勝ち馬を送り出したマグナグレシア(父インヴィンシブルスピリット)を、今回のこのコラムの主役として取り上げたい。

G3シルヴァーフラッシュS(芝7F)勝ち馬キヤバレー(父ガリレオ)の2番仔として、16年5月に愛国で生まれたのがマグナグレシアだ。同年11月に開催されたタソールズ・ディセンバセールの当歳セッションに上場されクールモアグループに34万ギニー(当時のレートで約5201万円)で購買され、エイダン・オブライエン厩舎の一員となった。

マグナグレシアは、2歳9月にナースのメイドン(芝7F)でデビュ。ライアン・ムーアを鞍上に3・1/2馬身差で勝利を収め、緒戦勝ちを果した。2戦めとなったG3オータムS(芝8F)では鞍上をドナカ・オブライエンにスイッチ。そこでは2着に敗

れたものの、再びドナカ・オブライエンとコンビを組んで臨んだG1フェュチュリティトロフィー(芝8F)に優勝。重賞初制覇をG1で飾るとともに、翌春の3歳クラシックへ向けた有力馬の1頭に浮上している。

マグナグレシアの3歳初戦となつたのが、3歳3冠初戦のG1英二千ギニー(芝8F)で、同馬はこれを快勝。鞍上のドナカ・オブライエンは、サクソンウォリアーで制した前年に続き、英二千ギニー連覇を果している。

ライアン・ムーアとのコンビで挑んだ次走のG1愛二千ギニー(芝8F)は、Good to Firmという硬めの馬場がフィットしなかつたか、5着に敗退。レース後、ハムストリングを傷めていることが発覚し、戦線を離脱することになった。5ヶ月の休養を挟んで、10月のG1チヤンピオンS(芝9F2 1/2Y)で戦線復帰したが、ここは14着に大敗。この1戦を最後に現役を退き、20年から愛国のクールモアスタッフで種牡馬入り。初年度の種付け料は2万5000ユーロだった。

その後、マグナグレシアの血統的価値は急上昇することになる。同馬の2歳以下の半弟セントマーカスバシリカ(父シーエー)が、20年10月にG1デューハースト

クリップスS(芝9F2 09Y)をはじめ、G1・4連勝を達成。欧州年度代表馬の座に就いたのである。

一方、21年に生まれたマグナグレシアの初年度産駒は、22年に欧州各国で開催された1歳馬市場に上場されたが、ありていに言つて、評判はそれほど芳しいものではなかつた。

上場された71頭の83%にあたる59頭が、平均価格5万6949ギニーで購買されたが、その平均価格は、18年の最優秀2歳牡馬トウーダーンホット(11万8000ギニー)、短距離G1・4勝馬ブルーポイント(10万0805ギニー)、短距離G1・2勝馬テゾンプリンス(6万6017ギニー)、短距離G1・3勝馬アドヴァタイズ(6万3571ギニー)といった、同期の新種牡馬たちよりも低い水準に終つたのである。

そんな中で迎えた23年、早々に勝ち馬を送り出せたことは、種牡馬マグナグレシアにとって追い風になるはずだ。

マグナグレシアの母キヤバレーが現役時代に制したG3シルバーフラッシュSと

は、施行時期が2歳7月で、つまりは「仕上がりの早さ」という素養を充分に持つているのがマグナグレシアだ。

今後も、2歳戦における同馬の産駒は、マークが必要となりそうである。